



古典落語大系 第四卷

責任編集 江國 滋

大西 信行 永井 啓夫

矢野 誠一 三田 純一

三一 書房

古典落語大系 第四卷

一九六九年八月三十一日 第一版第一刷発行
一九七三年一月十五日 第一版第二刷発行

編者 江國 滋・大西信行・永井啓夫
矢野誠一・三田純一

© 一九六九年

発行者 田川敬吾

発行所 株式会社三一書房

東京都千代田区神田駿河台一の九

電話東京(二九一)三二三一、五番

郵便番号一〇一

振替東京八四一六〇番

印刷所 株式会社三陽社

製本所 東京美術紙工

落丁・乱丁本はおとりかえいたしません

古典落語大系 第四卷 目次

天	災（てんさい）——心学の尾軀骨……………	七
	ずっこけ——ずっこけ仏……………	二
	化物使い（ばけものづかい）——労使にささげる寓話……………	二九
	だくだく——柳亭痴樂の『だくだく』……………	四三
	松山鏡（まつやまかがみ）——鏡のない国……………	五〇
	富久（とみきゅう）——酒乱濶歩……………	五七
	粗忽の釘（そこつのくぎ）——小田朝という人……………	七三
	紀州（きしゅう）——わが紀州など……………	八五
	岸柳島（がんにゅうじま）——巖流島説話考……………	九一
	突き落し（つきおとし）——『突き落し』にひそんでいるもの……………	九八
	鰻屋（うなぎや）——『鰻屋』の薄い影……………	一四
	夏の医者（なつのいしゃ）——すてがたいおもむき……………	二三
	宮戸川（みやとがわ）——『宮戸川』後日……………	三三
	半分垢（はんぶんあか）——あかすり談義……………	四一
	姫がたり（ひめがたり）——正岡容のこと……………	四九

船 徳（ふなとく）——竹屋のおじさん……………	二五
反魂香（はんごんこう）——わが高尾考……………	二七〇
厩火事（うまやかじ）——人間像の妙……………	二七
三方一両損（さんぼういちりょうぞん）——けっして悪いサゲではない……………	二六
お茶汲み（おちゃくみ）——涙のいろいろ……………	二九
妾 馬（めかうま）——八五郎は生きている……………	二〇六
庖 丁（ほうちょう）——庖丁のスキのなさ……………	三六
佃 祭（つくだまつり）——江戸の水難……………	三六
長者番付（ちやうじゃばんづけ）——運つく……………	二五〇
黄金餅（こがねもち）——『黄金餅』の世界……………	二六六
品川心中（しながわしんじゅう）——おそめにたいするぼくの弁論……………	二七五
御神酒徳利（おみきどっくり）——二つの『御神酒徳利』……………	二〇一

装幀 長尾みのる

古典落語大系

第四卷

天災（てんさい）

「へえ、まっぴらごめんねえ」

「だれだ、騒々しい。八公じゃねえか。まあ三日にあげず親子喧嘩夫婦喧嘩、人の家へはいつてくれば、いけぞんざいな、なんという口のききようだ。これ、いきなりあぐらをかく奴があるか。親しき仲にも礼儀ありという。坐らなければ失礼だ。なぜあぐらをかくんだ」

「へえ、もうどうぞおかまいなく」

「お構いなくという奴があるか。しょうがねえ奴だ。なんだ、なんの用があつてきたんだ。たいそうなけんまくではいつてきたが……」

「へえ、すみませんが、ちよいと離縁状を二本ばかり書いておくんなせえ」

「馬鹿野郎、離縁状を二本書けという奴があるか。こういう馬鹿野郎だ。一本はわかるとしても、あとの一本は何にするんだ」

「それアきまっています。一本は、かかあにやっちまうんだ」

「たいがい、かみさんにやるもんだが、二本というのがわからない。あと一本はだれにやるんだ」

「ええ、もう一本は家の婆アにやるんで」

「あきれた奴があるもんだ。婆ア婆アといって、あれはお前のおふくろさんじゃアないか」

「冗談いっちゃアいけません。それア気のきいた年増かなんかなら、お前のおふくろは、ちよいといい女じゃね

えか、なんて友だちにいわれても気がききますが、あんなしわくちや婆ア、みつとねえじゃありませんか。これからありますが、おつかさんなんぞといわねえようにしておくんねえ」

「親でなければいい。そんなに腹をたてることはない。ふうん、してみるとあれはお前のおかみさんのおふくろか」

「いいえ」

「それじゃア親類の婆さんか」

「いいえ」

「雇い婆さんか」

「いいえ」

「友だちのおふくろでもあるのか」

「いいえ」

「なんでいる婆さんだ」

「いいえ」

「なんでいる婆さんだというのに、いいえという奴があるかい、お前にとってはなんなんだ」

「なんでもありません。お前さんも知っているだろうが、死んだ親父のねえ、あの親父のかみさんでございませう」

「馬鹿野郎め、親父のかみさんなら、お前のためには、おふくろじゃアねえか」

「ああそうですか。そういう見当になりますかねえ」

「馬鹿野郎、火事とまちがえてやがら」

「そうですかねえ、あれがおふくろですかねえ、うすみつともねえ」

「みつともねえてえやつがあるか。女が年をとれば、みな婆さんになるもんだ。だいいち、親と名のつくものに、

離縁状をやるというやつがあるか。孝行をしたい時分に親はなしとってな、親はふたたびできない」

「あたりめえだア。子どもができちゃって、あとから親ができるやつがあるものか」

「それだから親を大切にしないというんだ。お前のような荒っぽい奴は心学というものを聞きに行くといい。たちまち気をやわらげるものだというから、実はおれの知っている先生に、せんだって、お前のことについて頼んである。さあ、ここで手紙を一本書いてやるから、これを持って行って心学をよく聞いてきなさい」

「へえ、ありがとうございます。けれども、ありゃア、溜飲にさわっていきません」

「溜飲にさわるといって、なんだと思ってるんだ」

「ええ、田楽でございましょう」

「田楽じゃアない。わからん男だなア。心学というのは、お前の心を修める学問だ。その相手の人物によってわかりよく説き聞かしてくれる」

「へえ、学問だなんて、あっしじゃアまるで読み書きはできねえんだ」

「ただ耳で聞くだけでりっぱな学問になるんだ」

「へえー、そいつア重宝だ。しかし行ったらすぐにやってくれましょうか」

「床屋じゃアなし、すぐもあともない。毎日遊んでおいでになるお方だから、親切に聞かしてくださるから、それをよく心に留めて、先生にいわれたことを十のものなら八つは守るようにしてみなさい。お前が生まれかわったような人間になるから。そうすればおれも世話がある。けっして悪いことはいわねえから、さあこの手紙を持って行ってきな」

「へえ、どこへ行くんです」

「この手紙に書いてある」

「書いてあるというけどねえ、いい年をして、この手紙のところへ行くんです、ちよいと見ておくんない、と人に聞くのも気が利かねえ。意地の悪いことをいわねえで、ちよいと教えておくんねえ」

「ははあ、なるほど読めんか。それは長谷川町の新道で、紅羅坊名丸先生とたずねればすぐわかる。たばこ屋の裏だよ。すぐに行きな、これこれあとを閉めて行きなさい」

「なあに、いまじきに來ますから、閉めずにおくと今度きた時にあける世話がねえ」

「馬鹿なことをいう奴があるか」

手紙を一本もらいまして、長谷川町へやってまいりましたが、同商売が何軒もごさいます。

「さあたいへんだ、左側だとか、右側だとか聞いてくりやアよかったな。同じたばこ屋がたくさんあって、わけがわからねえ。ここのたばこ屋の爺がねむたそんな面をして店番をしていやアがる……おい、爺さん」

「はい、なにをあげます」

「なにをいってやアがるんだ。人間を見りやア商いをすると思ってやがる。そう、うまくはいかねえ」

「なにかおたずねになるのか」

「おたずねってわけでもねえが、ここいらになんとかいう奴がいるかえ」

「ええ、なんとかじやアわからん。名前はなんという方だ」

「なんでもそれ、べらぼうになまけるとか、なんとかいう奴がいるだろう」

「ハハハ、なまけ者がこの近所にもたくさんいますが、そんな名前の人はいない——うん、お前さんのおっしゃるのは、紅羅坊名丸先生だろう」

「そのくらい知ってやアがって、さっきから空とぼけてかくしていやアがる」

「かくすわけじやアないが、お前のたずね方がちがつてるんだ。そんならば、この裏をはいったつきあたりの格子のはまった家だ」

「そうかいありがとう、……今日は……親方……大将……おい、だれもいねえのか、なまけものの家はこっちか」

「おやおや、どなたか知らんが、だれもおらんからこっちへおはいり」

「へえー、だれもいねえ所へはいつたって、しようがねえじゃありませんか」

「いや、わたしのほかはだれもおらんで、とりつきに出る者がいないから、こっちへおはいりというのだ」

「じゃア、ごめんなせえ」

「おや、お手紙をご持参か、拝見しましょう」

「はやく見ておくんなせえ、気が短けえ人間ですから、ぐずぐずしていると腹アたててすぐ帰っちゃいますぜ」

「いや、お手間はとらせません。お返事があるか、なんだかわからんから、ちよつと拝見をいたして……ほうほう……うん、ああさようですか、なるほどお前さんか、わたしの明友の隣家にいるのは」

「へえ、お前さんががす」

「なんだ、おかしな男だ。かねてお前さんの身の上は、うかがっていましたが、この手紙の様子では、おふくろさんがあるそうで、親孝行を第一になさらんければいかんよ」

「へえそんなんでねえやつをひとつやっておくんねえ。ためになるやつを、親孝行親孝行てえやつは、日に三度くらいいいわれているんです。もう少しためになる代物をひとつやってみておくんねえ」

「いやこれは困ったな。おはなしは一度してみようが、心学というものはおもしろいのかというのではない。喧嘩というものをなさる。この喧嘩をなされば、かならずお前のからだに損が第一にたつ」

「冗談いっちゃアいけません。損得を考えてそろばんをはじきながら、喧嘩をする奴はねえんじゃアございませんか。癪にさわりゃア今でも喧嘩アするんだ」

「まあ、大きな声を出して、それではお前とわたしと喧嘩をしているようだ。近所へきこえてもみっともないから、わたしのいうことをば耳だけで聞かんで、しかと腹までいれて聞いてください」

「腹で聞くてえと、ヘソの穴ですか」

「馬鹿なことをいいなさんな。ヘソでもものを聞くやつがあるものか。耳で聞くにはちがないが、うわの空で聞いたんではいけない」

「まあ、なんですか。気が短けえんですから、急いでひとつやってみておくんねえ」

「氣にいらぬ風もあろうに柳かな……おわかりですか」

「えーどうも感心なもんでけすな。恐れ入ったもんで」

「わかったかえ」

「いいえ」

「なんだな……柳というものはやわらかなものだ。南風が吹けば北へなびき、北風が吹けば南へそよぐ。風しだいになびくという。人間もそのとおり、心を素直にもてば、喧嘩口論もできんという道理だなア」

「冗談いっちゃアいけません。柳と人間といっしょにしちゃア無理じゃアござんせんか。柳は川端やお堀端にはえていて、それへ、そら、風があたりゃア枝がぶらさがってるから風のとおりに、ぶらんぶらんします。人間がそんなあんばいに、川ッ端でも通つているとこへ風が吹いてくりゃア、川のなかへころがり込んでしまふじゃアござんせんか」

「いや、そうわからんではいかん。柳のとおりに心をやわらかくもてというのだ」

「だってお前さん、人間てえものは、虫のいどころのいい時と悪い時があります。癪にさわりゃア喧嘩もするじやアございせんか」

「いや、それがいかん。腹がたつ、これをおさえるのを堪忍という。堪忍のなる堪忍はだれもする、ならぬ堪忍するが堪忍……堪忍の袋を首にかけ、やぶれたら縫え、やぶれたら縫え」

「南無阿弥陀仏……」

「これこれ、法談とまちがえてはいかん。お前には、並みのはなしではわからんようだから、はやわかりのはなしを、ひとつして聞かせよう。たとえば、お前が用たしに出る。店先きで小僧が水をまいている。お前の着物へ水がかかった。腹がたつだろう」

「たちます」

「それが、小さな小僧がしたんだ。その小僧と喧嘩ができるか」

「それア小僧と喧嘩はできません。小僧をその店へひっぱって、なんだってめえン所じゃア、こんな間拔けな小僧を飼っておきやアがるんだと、いんねんをつけます」

「飼つとくえやつがあるか。それでは風のある日に狭い横丁にはいる。風のために屋根から瓦がおちて、お前の頭へあたったら痛からう」

「それア、生きてるから痛うございます」

「その瓦と喧嘩できるか」

「瓦と喧嘩するやつがあるもんか。やつぱり瓦っかけを持って、その家へねじこみます」

「なんだって、その家へねじこむ」

「てめえン所で、高慢な面アしやアがつて、屋根へ瓦なんぞのつけやアがつて、どだい職人の手間を惜しむから、少しばかり風が吹いてもおっこちるんだと、そこへどなりこむね」

「それでは人間がいたり、家があつたりするから、食つてかかるところがあるが、たとえば、青山に大きな原がある、その大きな原へお前が用たしで通りかかるところが、にわか雨、夏の雨は馬の背をわけるといふ。晴天でいたやつがどうつとふつてくる。雨具がないからグッショリぬれてしまふ。小僧に少しの水をかけられて、少し腹のたつようでは、よけいぬれたから、よけい腹が立つ道理だの」

「そりやア、そうでさア」

「そのよけい腹の立つた時に相手はだれた。だれを相手にお前、喧嘩をしなさる……どうだね」

「それはいけませんね、雨がふると思やアうちから傘でも持つてゆきます」

「持つてゆけばもともとぬれるきづかいはない。にわか雨だ、雨具がなくなつて、ぬれて腹がたつ。だれを相手に喧嘩をする」

「もう、ようがす」

「いや、よいではわからない、どうする」

「どうするったって、それアいけません。そんなお前さん、手前勝手のことをいったって、しょうがねえ、まあ、ようがす、まけておきましよう」

「いいや、まけなくってもいい。その時にヤアだれと喧嘩をするよ」

「だれとするったって、相手のねえ喧嘩はできねえじヤアありませんか。あきらめてしまいます」

「どうあきらめる」

「そうつきあたりまで、聞きっこなしにしようじヤアありませんか」

「いや聞かなければいけない。どうあきらめるよ」

「どうもしかたがございません。人がふらしたわけじヤアないんで、天からふってきた雨だと思つて腹をたえずにあきらめてしまいます」

「それ、その道理だ。すべてその人と思わず天だと思つたらよからう。たとえば、小僧に水をかけられたら、原中で雨にぬれたものとあきらめる。人にこぶして打たれたら、屋根からおちた瓦だと、こうあきらめる。なんでも天より我が身体へかかる災とあきらめる。天の災と書いて天災と読む。なんでも天災じヤアとあきらめれば、腹をたてようと思つても腹が立つまい」

「ありがとうございます。お前さんなんぞは、顔はすいぶんまずいが、いうことだけはうめえこといいますねえ。早い話がお前さんと喧嘩をしようと思つても、天だところ思つちまうんですね」

「まず、そうだな」

「へえ、お前さんなんぞは、ちよいと素人見に天だと思いいいからねえ。上の方がまるくピカピカ光ってるから、なるほど天みたいな面だ」

「ませっ返しちヤアいけない」

「ありがとうございます。すっかり、これでわかつちまった」